

DOCTOR'S MAGAZINE

ドクターズマガジン

ドクターのヒューマンドキュメント誌

No.125 April 2010

4

平成18年4月17日第3種郵便物認可 平成22年3月20日(毎月1日20日発行) 定価250円

ドクターの肖像

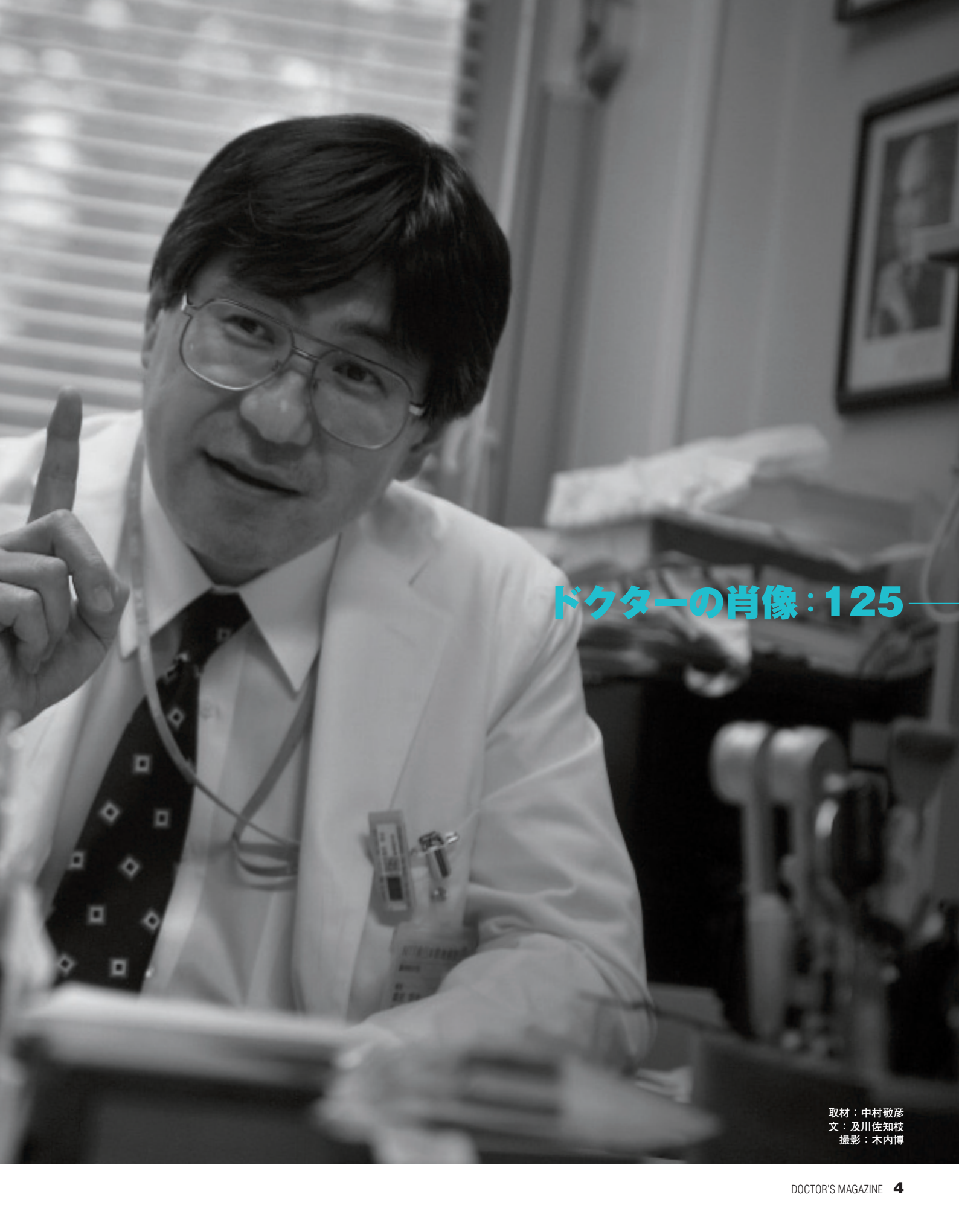
NTT東日本関東病院脳神経外科部長／脳卒中センター長

森田 明夫

Precusor—先駆者—

医療法人三つ葉代表

船木 良真



ドクターの肖像：125

取材：中村敬彦
文：及川佐知枝
撮影：木内博



めざす先は、“Beyond the scope”。
生まれ変わっても脳神経外科医。

NTT東日本関東病院脳神経外科部長／脳卒中センター長

森田 明夫

脳神経外科といえども

究極には全人的

医療が必要だ

浅い理解しか持っていない外野が勝手に決めつけたイメージが、当事者の一言で崩れる。そこそそが取材の醍醐味だが、今回のインタビュもまさにそうだった。医療の最先端の粋が集まったかに見える脳神経外科で活躍するN T T東日本関東病院脳神経外科部長／脳卒中センター長の森田明夫氏の間から、「全体を見渡せなければ、正しい医療はできない。脳神経外科といえども、究極には全人的医療が必要だ」との言葉を聞いたからだ。

「脳外科は、日本では確立してからまだ、半世紀がすぎたかどうかの若い科です。けれど、他科同様に細分化が進んで脳血管疾患、脳腫瘍、頭部外傷、脊髄・脊椎の病変、機能疾患や変性疾患、子どもの脳疾患など、いろいろな専門に分かれてきている。とはいえ、どれも脳の病気に変わりはなく、これ以上細分化が進めば、それこそ脳疾患であっても診断がつけられない脳外科医が生まれかねません。

先日、ある患者さんが、歩けなくなり、脊髄にとっても小さな腫瘍が見つかったからと僕のところを紹介されてきた。入院していただき調べてみると、腫瘍だけではすべての説明がつかない。両方の足に力が入らなくなり、だんだん筋肉も衰え……。結局、カルシ

ウムがうまく骨につかない内分泌の病気だとわかりました。すべての医療は診断をつけるところから始まります。脳神経外科医である前に全人的医療のできる医師でなければ、専門の知識も生かせない好例と言えるでしょう。

同様に、脳神経外科は、脳のほんの隅っこの部分を扱っているにすぎません。脳全体を理解し、かつ、そのうえに成り立つ狭い分野においてエキスパートな治療を行う。それが、脳神経外科医たる我々の役割だと僕は思っています」

人間のいちばん大切な部分を専門にし、最先端を走っているのだから、多少、尊大であってもいたし方ないのだろう……。脳神経外科、引いては脳神経外科医に対する浅はかなイメージは、根底から覆された。覆されたどころか、取材が進むとともに、取材陣は森田氏の人間性にどんどん惚れ込んでいった。

治療を成功に導くのは

稀なる匠の技や

ひとりの天才ではない

全人的医療の重要性を認識しつつ、最先端の技術修得に貪欲な森田氏への他の医師からの信頼は当然厚く、毎日のように難しい手術の依頼が、指名で舞い込む。

「最近、多いのは、良性の脳腫瘍や脳に動脈瘤のある血管障害、脳動静脈奇形など。要は、血管や神経を上手には

がすといったハイレベルな技術と経験を要する症例ですね。同じ腫瘍でも、脳腫瘍は、重要な機能が細かいところに密集する脳に生育するため、担うプレッシャーは大きいですね」

脳腫瘍は、胃がんのように胃の半分を取っても、もしくは全部を取っても大丈夫、大腸であれば腫瘍から3センチ四方離れた部分を切り取っても大丈夫という世界とは違う。脳腫瘍のまわりには重要な神経が網の目のように走り、損傷させればどんな機能障害につながるかわからない。したがって、ギリギリの部分での切除をめざし、どうしても取りきれなかった腫瘍には、放射線治療と化学療法で対処する。

「ですから、脳神経外科の治療を成功に導くのは、稀なる匠の技や、ひとりの天才が起こす奇跡などではなく、チーム医療なのです。精度の高い数値を教えてください。検査技師や、予後を支える薬剤師による医薬のコントロールなど、多くの医療者の最新知識と技術が集積した『最先端』を担う一翼として、いかに自分を機能させるか。そこに僕がめざす脳神経外科医のプロフェッショナルリズムがあります」

現在のライフワークは

未破裂脳動脈瘤の

治療法の確立

現在のライフワークは、未破裂脳動脈瘤の治療法の確立だという。驚くべきことに、未破裂脳動脈瘤では、手術



PROFILE

(もりた・あきお)

- 1978年 東京大学医学部医学科入学
- 1982年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院脳神経外科入局
国立病院医療センター脳神経外科研修医
- 1983年 東京大学医学部附属病院脳神経外科研修医
広島県福山市新市町寺岡記念病院脳神経外科
- 1984年 三井記念病院脳神経外科
- 1987年 静岡県富士宮市富士脳障害研究所附属病院脳神経外科
- 1988年 東京都立神経病院脳神経外科
ECFMG certificate取得
日本脳神経外科学会専門医取得
- 1989年 アメリカミネソタ州ロチェスター市メイヨークリニックへ臨床フェローとして留学
- 1990年 アメリカ連邦医師資格試験合格
- 1991年 メイヨークリニック脳神経外科レジデント
アメリカミネソタ州医師免許取得
- 1995年 アメリカワシントン地区ジョージ・ワシントン大学脳神経外科頭蓋底外科フェロー(インストラクター)
- 1996年 メイヨークリニック脳神経外科チーフレジデント
- 1997年 広島県福山市新市町寺岡記念病院脳神経外科部長
アメリカワシントン地区ジョージ・ワシントン大学医学部脳神経外科Assistant Professor (講師)
ドイツマインツ大学脳神経外科Visiting Clinician for Minimally Invasive and Endoscope Assisted Neurosurgery
- 1998年 アメリカメリーランド大学脳神経外科Clinical Assistant Professor兼任
東京大学脳神経外科講師
- 2001年 東京大学脳神経外科助教授
- 2006年 NTT東日本関東病院脳神経外科部長 / 脳卒中センター長
東京大学非常勤講師

父が購入した「偉大なる頭脳」というプラモデルの箱。非常に精細な脳の模型を小学校時につくり、脳神経外科医をめざした



大学卒業時に旧ソビエトを横断するシベリア鉄道コンパートメントで。9日間かけてモスクワ、北政を旅する



Dr. Sundtとともに手術



1995年ワシントン滞在時、シェナンドアのキャンプ場。料理の腕を磨く



2006年2月、東京大学助教授のところに聴神経腫瘍の手術を行う



小学校4年生時に家族との四国旅行で五色台にて。毎年、夏休みにはいろいろなところに旅行に行ったという



大学4年生のときにはスキー部のキャプテンを務める。長屋憲氏（現吉祥寺南町診療所所長）、村島隆太郎氏（現浅間総合病院院長）、唐澤克之氏（現都立駒込病院放射線診療科部長）とスキー部の合宿にて



厳寒（マイナス30度）のメイヨーの冬、Mayo Building前にて



恩師であるDr. Sundt（ご夫妻）、福島孝徳先生とロチェスターでの会食



「愛・地球博 EXPO2005」に東京大学工学部の光石衛研究室と共同制作のマイクロサージェリーロボットシステムMM-1を展示



2010年の新春に、今いるNTT東日本関東病院の仲間たちと

すべきか否かを判断する根拠さえ確立されていない。森田氏は東大とコラボレーションをして全国の病院に協力を呼びかけ、治療方法のデータを集め、手術の必要性を判断する基準を含めた未破裂脳動脈瘤の治療ガイドラインを作成している真っ最中だ。

「実は、東大医局で血管障害を手がけていたところに請け負わされた仕事のひとつでもあるのです。脳神経外科の前教授の桐野高明先生と札幌医科大学の前教授である端和夫先生が始められ、あるとき、『お前が、まとめろ』とご指名を受けました(笑)。アメリカ留学中の師匠のDr. Smithが動脈瘤の大家で、彼からの教えが研究のモチベーションを高める要因のひとつにもなっています。

人種の違いなのでしょう、アメリカ人の動脈瘤は、破れようもないほどカチンコチン。比して、日本人の動脈瘤は、ものすごく破れやすい。留学後、遅々として進んでいない未破裂脳動脈瘤の治療を見るにつけ、もう、これは自分がどうにかしなければならぬとの使命感に突き動かされ、日本全国の施設の協力を仰いで治療方法の確立を心に決めました」

どの医療機関の臨床医師も忙しく、面倒な作業は嫌がる。そこで、手間がかからないようインターネットを使い、登録したひとりの患者に対し3〜5分で書き込みが終わるフォーマットをつくった。さらに3カ月、1年、3年のインターネットで経過を登録できるようにした。簡単な登録システムにし

た甲斐があつて、データ収集は順調。「今のところ約7000にも上る症例データが集まっています」と森田氏は笑みを浮かべて話す。

すでにデータ収集は終盤に入っており、最終報告が聞かれる日も、そう遠くない様子。未破裂脳動脈瘤は、がんなどとは違い、絶対に手術を要する疾病ではない。森田氏によれば、「たぶん、半分の症例に手術は不要」。彼が牽引する研究成果から、手術を要するか否かの判断に関しある程度のガイドラインができたなら、未破裂脳動脈瘤の治療は大きな変革を迎えるはずだ。

行動規範のひとつは

「行けるところまで行ってみよう」

取材を通し、森田氏の行動規範のひとつが理解できた。「行けるところまで行ってみよう」——精緻な計算があるわけでも、行った先に成功が約束されているわけでもなく、周囲に「損をするぞ」とアドバイスされても、行ってみなければ行く。医師という職業に就く人、ましてや大学の発想としては、はなはだ異質。しかし、思えば、あまねく分野に共通して、時代をつくった偉人たちが等しく持つメンタリティだ。無垢な好奇心と冒険心と、それに従い行動する勇気を森田氏は持っている。

「僕は、まだまだ若造で、人生を振り返る段階ではないと思いますが、あえ

て、これまでの医師人生を顧みるならば、アメリカにいた9年間に受けた影響の大きさを思い知ります。大学卒業後、母校の脳神経外科に入局し、多くの偉大な先生からすぐれた教えを受けました。でも、僕は、どうしてもアメリカに行きたかった。当時、日本の脳神経外科の技術はアメリカと肩を並べており、教授には『アメリカに行っても、学ぶものはないよ』と言われましたが、僕はなんの根拠もなく、最低5年はアメリカに行きたいと思い込んでいたのです」

そして、岩をも貫く一念が、名門メイヨークリニックへの留学への道を拓く。

「僕の人生には計画性がなくて、どこまで何をするとか、どこまで何をしようなどいっさい考えていません。とにかくあるのは、行けるところまで行きたい、行き着けるところまで行きたいとの思い。

確かに技術的にはアメリカで学ぶ点はなかったかもしれませんが、僕は違うディメンションで医療を見てみたかった。渡米して願いは見事、叶いました。メイヨークリニックは、最高の舞台でした」

メイヨークリニックに学ぶべき点が多い、とは、すぐにわかった。森田氏個人にとってはもちろん、日本医療界が真摯に学ぶべき点も少なからずあると感じたそうだ。

「メイヨークリニックは、たいへんな田舎にあるのですが、大勢の患者が来院し脳神経外科だけで年間3000(

4000の手術を行う。しかも、ほとんどが非常に難しいと言われる脳の深部の腫瘍や、大きい動脈瘤、ぐにゃぐにゃになった脊髄などの手術です。これらの手術をできる力が、このクリニックのどこにあるのか。思いたったのは、伝統でした。

先生方一人ひとりを見ると、図抜けてすごい人ばかりかと言えば、そうでもない。結局、施設で培われた力が、きちんと次の世代に受け継がれているから可能なのです。

僕が、100年前のカルテを見せてとリクエストすると、すぐに出てきました。本当にすぐに、ですよ。信じられない。読みやすい英語で書かれていました。日本でなら、たとえ100年前のカルテが出てきたとしても、汚い走り書きで、なんと書いてあるか絶対にわからないでしょう。経験の蓄積がいかに大切かが理解され、それがシステム化されている。100年後、200年後を見通したシステムがつくり上げられているのです。もちろんイノベータータイプな人材の登用も、要所、要所で行われていました。日本の医療で足りないのは、長い目で見すえたシステムづくりだと痛感させられました」

手術に dignity が
あるのを感じた

Dr. Sundt への出会い

そして、忘れえない邂逅。世界的脳神経外科医の Dr. Sundt への出会い。

「神々しい」と映る手術を行い、不屈の精神力を持つ名医は、やがて森田氏の恩師となっていく。

「Dr. Sundtは当時、1986年に悪性骨髄腫と診断され、あと半年の命と宣告されたにもかかわらず、2冊の脳血管外科のバイブルとも言うべき本を完成させ、激痛に耐えつつ臨床もしていました。

僕はメイヨーで、最初は言葉の壁が大きく『できないやつ』の烙印を押されたのですが、Dr. Sundtに助けられました。あとはもう、先生の背中を追って死に物狂いでがんばった。必死の努力は報われ、2年後にはレジデントになり、Dr. Sundtの助手までさせてもらいました。チーフレジデント並みの扱いです。

手術に dignity があるのを感じたのは、Dr. Sundt へからです。うまい、下手などといった域を超え、すべてが美しく神々しい。クリップを動脈にかけるとき、普通だとヒュッとかけるのですが、先生がかけると、ものすごく厳かな音がするような気がした。今までの中でいちばん幸せな時期だったのかもしれない。そういう方といっしょに手術ができて——」

恩師亡きあと、メイヨーに残りたいと希望した。しかし、権力闘争に巻き込まれて叶わなかった。腕を買われてジョージ・ワシントン大学医学部脳神経外科頭蓋底外科 Assistant Professor になるなどしたが、メイヨーでの充実感はずれえず、迷った挙句に1998

年、帰国。東京大学脳神経外科講師のポストを得、助教を経て2006年には、脳神経外科部長／脳卒中センター長としてNIT東日本関東病院に赴任した。

今の心境を問うと、満面の笑みで答えが返ってきた。

「僕がやりたい手術や治療が、思い切りできる。すごくいい環境で仕事をさせてもらっています」

夢中でプラモデルを

つくりながら

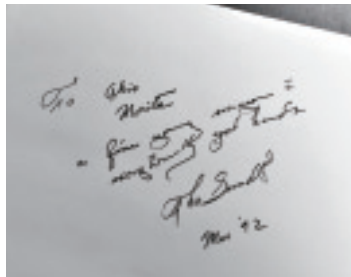
脳外科医になると決めた

なぜ、医師をめざしたのか。なぜ、脳外科であったのか。これほど明確な理由がある人物は稀だろう。

「父は不況のあおりでサラリーマンから商売を始めざるをえない状況になった経験からでしょう、『男でも、女でも、手に職をつけろ』が教育方針でした。そして僕は、『医者になれ、医者になれ』と、常に言われつづけていました」

父親は、子ども心をつかむ術を熟知していたようだ。森田少年の気持ちを決定づけ、しかも脳外科の医師をめざす決意を固めさせてしまう。

「小学校6年生のころ、父から『偉大なる頭脳』というプラモデルをプレゼントされました。今、思うとすごいプラモデルで、脳の細かい神経から、眼球まわりの筋肉まであるんですよ。当時で1万円くらいしたそうで、子ども



Dr. Sundtから贈られたサイン入りの脳血管外科の著書

向けではなく、医学部の学生のためにあるような品物でしたね。見たことのない複雑さが、たまたまなく魅力的で、夢中でプラモデルをつくるうち、医師になろう、脳外科医になろうと思っていました。父の思う壺にはまったわけです（笑）」

いかにプラモデルが面白かったとはいえ、父親の思いを正面から受け止めるとは、幼少期の森田氏は、ずい分と心根の素直な子どもだ。

「自分で言うのもなんですが、純粋な子でしたね。両親にも、あまり反発した記憶はありません。愚直で鈍くさかったとも言えますが（笑）。

他者から言われることを染み込むように全部吸収する子でした。ただ、父の思惑どおりに選んだ道ですが、今は、生まれ変わっても脳外科医になりたいと、自らの意思で断言します」

小学校6年生以降、脳外科医になる目標に向かって一目散に進む。邪念や迷いが入り込む余地は、まったくなかったのだろうか。

「僕は、人生の中で何回かはひとつの方向に全エネルギーを傾ける期間が必要だと思っています。そのせいか、わずかの迷いもなく、医師になる道を選びつづけました」

この回答に、森田氏の本質が詰まっていると思った。確かに確固たる目的意識に裏打ちされた人生もあり、それもまたすばらしい。だが、情念に包まれた動機などなくとも情感にあふれた人生は歩める。目標に立ち向かう強い純粋さ、一心不乱に目標を追い求める

集中力があれば、テクノクラートの頂点にたどり着くことも、深い人生観も身につけられるのだ。

自ら社会に役立てる人間にならないと示しがつかない

取材の帰り際に、父親の商売の内容を尋ねた。小学校6年生の息子に医学生がつくるようなプラモデルを買い与えた父。どんな人物だったのかを聞かねば、森田氏の真実の姿が見えないと思ったからだ。取材途中にも質問したが、なんとなくはぐらかされてしまっていた。

失礼だとは思ったが、惚れた二心、森田氏を知りたい一心で、勇気を振り絞って質問した。「ところで、お父様は、どんなご商売をされていたのですか？」。森田氏は、ちよつと戸惑いつつ「金属関係の商売です」と答えたとき、あとに言葉はなかった。

数日後、森田氏から取材に対する丁寧なお礼のメールが届いた。

「自分のまだ何も成し遂げられていない人生で、常にめざしていることといえば、「見えないところまで夢を持ちつつつづけること。"Beyond the scope"という考え」、「決められた枠にとらわれないこと」です。それが、うまく伝われば良いと思っています。

ただ、ひとつ、とても恥ずかしく感じたのは、父の商売のことを聞かれたときに、なんとなくぼかして言う自分

がいたことです。自分を育てた元をほかすのは、自分をほかすのと同じだと思います。よく言う、「天に唾する」ですな。

父は慶應大学を卒業して、防府のカネボウに入社したのですが、退職し、自宅の家業であった織物工場を始めました。それが繊維不況のおおりに受けてうまくなり、当時の建築ブームに乗って、主に建築資材を扱う金物業を始めました。同時に、我々の教育のためにいろいろな兼業——土地があったので、アパート経営やNTTの会社の寮などをやっておりました。昔は、父の配達に乗るのが好きでした。ほこり臭くて、少し金属と油の臭いがしました。

我々姉弟にはいつも「手に職！」と言い、いろいろなアイデアを持って生きていた父でしたが、私がアメリカに留学中の13年前に若年性アルツハイマーにかかり他界しました。その父の年齢まであと10年少々しかありません。昨日はお話のあと、そんなことを思い出していました。

いずれにしても、自ら社会に役立てる人間にならないと、懸命に育ててくれた父に示しがつきません。過去と足元を見て、遠くを見て、そして、その先を夢見ることを大切にしていきたいと思えます——

人は「見えるから」なんとか夢を見つづけられる。けれど、森田氏は「見えないところまで夢を持ちつづける」と言う。我々は、惚れる相手を間違えてはいなかった。